

15 K J 法による歯科技工士教育の問題抽出

○植木 一範 五十嵐雅子 中澤 孝敏 佐々木 聡

(歯科技工士学科)

【はじめに】

本学における歯科技工実習は、教員一人あたりの学生数が多いという特性上、さらなるインストラクションの効率化と質の維持向上が求められている。そこで、本学科では学生対象の研修会を開催し、技能を上げるために今の歯科技工実習には何が足りないのか、それはどうしたら解決するのか等を考えて自己開発することを目的として、K J 法を用いたグループ学習を行っている。今回、2年分のデータが得られ、歯科技工実習における問題を抽出し、分析したので報告する。

【対象および方法】

対象学生は、平成17、18年度歯科技工士学科1年次学生とした。実施時期は、両年度、実習に慣れてきた7月中旬とした。K J 法の実施は、1グループ7～10名とし、教員をグループに1名ずつ配置して行った。歯科技工実習における指導や環境の問題点を抽出し、その原因を考えて分類した。さらに2次元展開法を用い、横軸を重要

度、縦軸を緊急度とする2次元平面を作り、問題の優先度を探った。後日、さらに具体的な問題解決策を各自立案し、内容をレポートにて提出させた。

【結果および考察】

K J 法による意見抽出の結果、「デモが分かりづらい」「見づらい」「専門用語がわからない」「指導が分かりづらい」などの意見が多く抽出された。「指導法」のカテゴリは、二次元配置を行った結果、実習の出来に直接大きく影響があるとされたため、重要度、緊急度ともに高く位置づけられた。「指導の統一」というカテゴリは、重要度は高いが、解決には時間がかかるという結果であった。「作業環境問題」に関するカテゴリについては、緊急性が高く位置づけられた。「学生内問題」は、重要度、緊急度共に低い位置にあるが、対策は行い易いという意見であった。その他、教員の絶対数が足りない、実習時間が足りない、材料が足りない、人間関係問題などのカテゴリが抽出され、それぞれ優先度が分析された。

16 歯科衛生士学科2年の歯科技工室・ことばクリニック見学実習の効果と課題 —明倫短期大学付属歯科診療所における取り組み—

○木戸真紗美、本間 和代、渡辺 美幸、幸田 奈美

(歯科衛生士学科)

【はじめに】

歯科衛生士が業務を行ううえで、チーム医療・他の医療職業務の理解を深めることは必要かつ重要であると考え。そこで、歯科技工士および言語聴覚士の業務を理解することを目的に、本学歯科衛生士学科2年の臨床実習において、本学附属歯科診療所に併設されている歯科技工室、ことばクリニックの見学実習を取り入れ、その効果と課題を検討した。

【対象および方法】

対象は、平成18年5月～11月までの期間、本学附属歯科診療所で実習を行った歯科衛生士学科2年生87名とした。調査は見学前に、見学希望の有無、見学したい内容、歯科技工士、言語聴覚士の職業に対する理解度等を、見学後に、見学の内容、勉強になったこと、実習に関する要望等についてアンケートを実施し、その結果を分析した。

【結果および考察】

歯科技工士、言語聴覚士業務の認知度は、見学前はほとんど知らなかった者が各々36%、48%であったが、見学後は12%、3%に減少した。歯科技工室見学において、学生が希望した補綴物作製過程を見学できたことは、その後の診療補助実習時の理解に繋がったと思われる。ことばクリニックの実習は、来院患者と接するトレーニング参加型が多かったことから、小児の年齢に応じた発育段階や対応について理解できたと思われる。本実習は、歯科技工士、言語聴覚士の業務と歯科衛生士に必要な知識や患者対応について理解を深めると同時に、チーム医療の大切さを学ぶのに役立ったと考える。また、実習時間に関する学生の要望が多かったことから、今後、本実習を充実させ短期間で教育効果をあげるために、事前学習や実習方法の検討が必要であると思われる。